耕畜連携による飼料自給率の向上と堆肥利用の促進

■　管内畜産農家、集落営農法人、耕種農家　■

（中讃農業改良普及センター　眞鍋雄二、川西　勲、○政木哲哉）

●対象の概要

中讃管内の畜産農家は、担い手の高齢化や混住化が進み、飼養戸数は減少しているが、所得向上を図るために、規模拡大に取り組んだり、一貫経営への経営転換を行う農家も少なくない。

また、耕種農家においては、農業従事者の高齢化等による担い手の減少や、耕作放棄地が増える中、地域農業を維持し農地を保全していくための集落営農の組織化が進み、特に集落営農法人は増加している。

●課題を取り上げた理由

高品質な畜産物を生産するため、畜産農家は安全・安心で品質の良い粗飼料を求めており、高騰している飼料費の低減を図るため、地域における稲わら等の粗飼料は貴重な資源である。

しかし、耕種農家においては、稲収穫後に麦や野菜を作付する際に稲わらが邪魔ものとして扱われ、焼却されるなど有効利用されていない。

また、家畜排せつ物法の施行後、畜産農家では堆肥化施設の整備が進み、耕種農家のニーズに即した良質な堆肥が生産されるようになってきたが、堆肥を使用する耕種農家との繋がりが薄いため、安定した供給先が見つからず、苦慮している場面もある。

一方、集落営農法人では、夏場の水事情の悪いほ場や作業性の悪いほ場で、飼料作物の生産に取り組む組織もあり、稲わら収穫などの作業支援の可能性がみられた。

そこで、地域資源の有効活用と飼料自給率の向上を目指し、畜産農家と耕種農家との結びつきを強化し、互いに協力していく連携活動を支援した。

●普及活動の経過

１　集落営農法人への稲わらの利用推進

地域の稲わらを効率的に収集し有効活用していくため、集落営農担当と連携して、麦作推進大会や農作業安全講習会を開催する中で、集落営農法人を対象に稲わら収集のＰＲと意向のアンケートを実施した。

２　飼料作物の作付推進

自ら稲わら収集を行っている（農）多度津五月会では、夏場の水事情の悪いほ場や作業性の悪いほ場を休耕していたことから、新たな耕畜連携モデルとして、昨年度からスーダングラスの生産を推進し、栽培及び乾草調製の指導を行った。

本年度は、より多くの収穫量を確保するため、１番草収穫後に施肥を行い２番草の栽培に取り組んだ。

収穫作業は、フレールモアの利用により草の乾燥が促進されたほか、調製作業は、稲わらを収集する小型ロールベーラを活用することにより、機械の有効利用を図っている。調製したスーダングラスは、管内の繁殖農家等とマッチングを行った。

スーダングラスの乾草調製作業

３　家畜ふん堆肥の利用促進

堆肥の利用促進の一助として、仲多度地域耕畜連携協議会と連携し、仲多度地区のＪＡ集荷場において、野菜等の栽培者向けに堆肥のサンプルを展示して、家畜ふん堆肥の利用拡大を図った。

また、昨年実施した耕種農家へのアンケートにおいて、実際に堆肥を使ってみたいという要望があったことから、「お試し用」としてＢ４サイズの袋に堆肥を詰め、希望者が無償で持ち帰ることができるように工夫を施した。

堆肥のサンプル及び試供品の展示

さらに、管内のブロッコリー農家を対象に、野菜担当と連携して講習会に併せて堆肥利用の推進を図った。特に家畜ふん堆肥の特徴や施用効果、利用上の留意点等について説明し、堆肥の効果をＰＲした。

このほか、綾川町には大規模な養豚農家があり、豚の飼養頭数が多く、堆肥の量も多いことから、ＪＡ綾坂地区管内においては、豚ぷん堆肥を重点にサンプルを紹介する等、地域の実情に応じた堆肥の利用促進を図った。

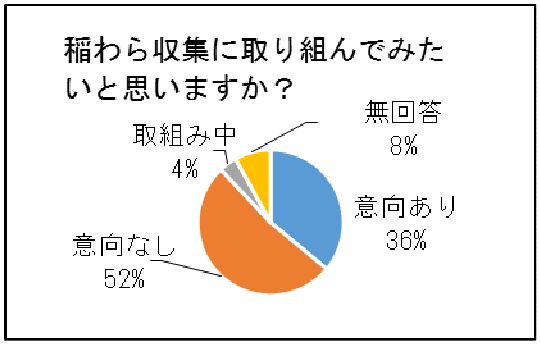
●普及活動の成果

１　稲わらの利用促進

集落営農法人に対する稲わら収集の意向調査結果では、取組み意向のある法人の割合は約４割と高く、稲わらの焼却時に発生する煙や稲収穫後の水田の乾きの悪化、後作の作業性などの問題があった。

また、補助事業等を活用しての稲わらを収集する機械の導入意向は少なく、オペレータや作業支援の労働力が不足している法人が約６割と多かった。

稲わら収集に意向のある法人に取組みを推進したが、機械の整備や労働力の確保が課題であるが、具体的な取組みにつながる気運の醸成が図られた。



図－１　集落営農法人に対する意向調査（管内）

２　飼料作物の利用促進

今年度の（農）多度津五月会のスーダングラス作付面積は、約３haと昨年並みであったが、１番草の収穫後に再生する２番草の栽培に取り組んだ結果、収穫量は昨年度と比較して約2.5倍に拡大した。

調製した乾草は天候の影響で品質が左右されることがあるが、１番草については良質に仕上がり、申し分のない品質であり、次年度の畜産農家とのマッチングに追い風となる要因となった。

３　家畜ふん堆肥の利用促進

堆肥の成分や価格、散布等の情報も示したところ、従来行ってきた堆肥のサンプル展示に加え、品質を一目瞭然に確認できるほか、耕種農家が堆肥を購入しやすくなった。

また、新たに取り組んだ「お試し用」堆肥の試供品の設定によって、実際に使用する生産者もおり、堆肥をより身近に感じてもらえることができた。試作用で使用するには量が少ないという意見もあるため、今後検討していきたい。

このほか、ブロッコリー栽培講習会に併せた家畜ふん堆肥の講習会を行うことにより、ブロッコリー農家から、豚ぷん堆肥の引取価格や散布条件に関する問い合わせや購入の注文もあり、豚ぷん堆肥の販売拡大に繋がった。

●今後の普及活動の課題

新規に稲わら収集に取り組むには、稲わら収集に関心のある耕種農家と畜産農家が収集機械や労働力を補完し合い、耕畜連携に取り組む体制が重要である。既に取り組んでいる農事組合法人の事例などをモデルケースとして積極的に紹介することにより、取組みの更なる拡大を目指す。

また、スーダングラスの生産については、排水対策による収量の向上を図るとともに、畜産農家が求める品質への理解の醸成及び、耕種農家に品質向上の指導を行い、他の組織への波及を進める必要がある。

家畜ふん堆肥は、地力が低下した農地の土づくりに欠かすことのできない有機資源である。サンプル展示や野菜の講習会等での紹介により利用の幅は広がっているが、さらに耕種農家に堆肥利用の効果をＰＲするとともに、労力面も考えたうえで、良質堆肥の生産供給と合わせて堆肥の散布体制を構築していく必要がある。